

「メディアからのアプローチ」の概要

本郷 健^{*1}

＜概要＞現代の「学びの環境」を考えると、e ラーニング、遠隔教育やデジタル教科書等、ネットワーク環境や情報通信メディアの整備は必要不可欠のものとなっている。本セッションでは、新たな「学びの環境」を推進する最前線で活躍されている3名の登壇者を迎えて、現在の教育の課題や将来の学びの環境の在り方について、どのような考え方と戦略によって、アプローチしようとしているのかを報告頂き、将来の学びの姿について議論を深める。

＜キーワード＞学びの環境、遠隔教育、デジタル教科書、MOOC、manavee、教育の情報化

1. はじめに

教育の情報化がスタートして、約30年の月日が経つ。その間、さまざまなメディアが登場し、期待を寄せられながら、現実的には教育現場に深く定着することなく現在の状況に至っている。

メディアは単なる道具である。されど、我々の思考方法まで規定する道具でもあることはよく知られた事実である。「声の文化と文字の文化」を書いたJ. オングの詳細な分析から明らかになったことは、例えば、文字というメディアを手に入れたことで、我々は書くように話し、論理的で分析的な厳格さを求める感覚を手に入れたといわれる¹⁾。また、同時に自らの思考から離れ、外側から眺める感覚「外化」を手に入れたともいわれる。このように、教育にとって重要な分析的あるいは論理的な思考方法の芽生えは、文字という新しいメディアを手に入れることによって、動き始めたといつてよい。

さて、『「今」にふさわしい学びの環境を作る』というテーマに対して、「メディアからのアプローチ」を試みる本セッションでは、メディアが「現代の学び」のどこを、どのように改善し、本質的な変革を試みよとしているかを議論し、メディアが作り出す新たな学びの可能性について、そのビジョンを共有していきたい。

2. 登壇者について

福原美三氏（明治大学）は、MOOC推進団体JM00Cの事務局長として、MOOCの思想の普及とシステムの拡大を推し進めている中心人物の一人である。JM00Cのミッションステートメントには「学びによる個人の価値を社会全体の共有価値へ拡大するMOOC」とある。本ミッションが設定された背景は何か。日本の教育における課題とその解決との関わりからスタートし、現状そして将来についての話題を提供していた

だく予定である。大学教育や社会人教育が中心と考えられがちなMOOCを初等・中等教育へ拡張する意味や意義、その戦略についてお話しいただけるものと期待している。また、ビッグデータとなるであろう学習履歴の具体的な活用方法なども議論していきたい。

NPO法人manaveeの手嶋毅志氏は、マネージメントチーム責任者として、manaveeの全国的な活動を支援している。本NPOはユニークな活動で注目を集めるだけでなく、その活動の目的が日本社会に内在する格差社会とそれを生み出す一因としての教育システムへの挑戦という課題に取り組む組織でもある。創設以来、十数年となるその間の成果や情報通信メディアによって教育環境の何をどのように改善できてきているのか、また今後の方向性と課題について語って頂く予定である。

山本利一氏（埼玉大学）からは、学校教育におけるタブレットPCの活用について、実践データに基づく分析から、その有効性および課題について報告して頂く。教育現場で注目を集めるタブレットPCは、教室での学びの何をどのように変える可能性があるのかを、具体的な事例の紹介を通して論じて頂く予定である。

3. まとめ

概要説明、登壇者からの報告、ディスカッション、会場からの質問等を交えて進める予定である。本セッションは、知識基盤社会における「学びの環境」はどうあるべきかをメディアから考える一つのアプローチである。議論を通して、在るべき「学びの姿」の一部でも共有できれば、幸いである。

参考文献

1) Walter. j. Ong, 声の文化と文字の文化, 藤原書店, (1991)

*HONGO, Takeshi : 大妻女子大学 e-mail= t_hongo@otsuma.ac.jp